

ペトラルカと対話体文学

近藤 恒一

Franciscus

創文社刊

ペトラルカと対話体文学

近藤 恒一



創文社

近藤 恒一（こんどう・つねいち）

1930 年高知県に生まれる。58 年，広島大学大学院文学研究科博士課程修了。61-67 年，ボローニャ大学に留学。79-80 年，90 年，フィレンツェ大学およびフィレンツェ国立ルネサンス研究所にて研究。ボローニャ大学講師，大分大学助教授，東京学芸大学教授，京大・東大併任講師をへて，東京学芸大学名誉教授。文学博士（京都大学）。

〔著訳書〕『ペトラルカ研究』（イタリア政府マルコ・ポーロ賞），『ルネサンス論の試み』（以上，創文社），ペトラルカ『ルネサンス書簡集』『わが秘密』，カンパネッラ『太陽の都』（以上，岩波文庫），ガレン『ヨーロッパの教育——ルネサンスとヒューマンイズム』（サイマル出版会）ほか。

ペトラルカと対話体文学

ISBN4-423-17105-8

1997 年 11 月 25 日 第 1 刷印刷

1997 年 11 月 30 日 第 1 刷発行

著 者	近 藤 恒 一
発行者	久 保 井 浩 俊
印刷者	安 達 精 治

発行所 〒102 東京都千代田区麹町 2-6-7 株式会社 創 文 社
電話(3263)7101 振替 00120-0-92472

著者との申し合せにより検印省略 Printed in Japan 晒印刷・鈴木製本

まえがき

つねづね研究にあたっては、なるべく一次資料あるいは一次文献に即して理解し、事実 に即して認識したいと願っているが、事象次元の認識だけでは満足できない。できるだけ理解を深めるために、理論的な把握も試みたくなる。本書第Ⅰ章の「修辭学的対話」という用語も、そのような試みのなかで着想されたものである。

「修辭学的対話」という表現は、おそらく奇異に感じられるのではあるまいか。「対話」はもとものとソクラテスの問答法（ディアレクティケー）とむすびついたものというのが通念になっているからである。しかも修辭学は、ソクラテス・プラトンがきびしく批判した時流の弁論術（レートリケー）に源流をもつ。しかし、ペトラルカの実践した「対話」の理念的なありようを把握しようと努めているうちに、修辭学的対話という用語があぶりだされてきたのである。こういう経験はほかにもある。たとえば「具体的人間への志向」という定式化もそうで、ペトラルカの中核的関心をなす「人間への関心」にこだわっているうちに自然に着想されたものである。そして「具体的人間への志向——人間（抽象化）の拒否」という一文も生まれた。

ひとたび理念型が構成されると、これに照らしてさまざまな関連事象やその本質が見えてきやすく

なる。もちろん理念型は研究の手段。有効であるかぎりは利用するが、その不充分性や一面性に気づけば修正し、あるいは捨てればよい。ペトラルカ研究においていちばん重要なのは、ペトラルカ研究の手段ではなくペトラルカという問題そのものである。だから、なによりもまずペトラルカその人に、そしてかれの人間性の表現である作品に、くりかえし虚心に触れていきたい。そのような触れあいによる直接経験こそ、研究の出発点であり還帰点であろう。しかしわたしは、経験だけで事足りるとおもうほど楽観的な経験主義者にはなれない。学的探究において、理念論的な把握や理論構成に無関心であることは、知の体系化や相対的な全体化の努力を放棄するもので、怠惰と無見識のしるしであろう。それは自覚的な体系主義拒否とは無縁のこと、別次元のことである。

ペトラルカの「修辞学的対話」は、対話精神の原点であるソクラテス＝プラトンの対話とも共通性をもつが、しかし基本的に異なる。この「対話」の中心的構成要素をなす伝統は、さしあたり私見によれば、ソクラテス＝プラトンの対話精神のほかに二つある。ひとつは修辞学的伝統。ソクラテスのディアレクティケーに源流をもつ狭義の哲学的伝統（哲学・論理学的「伝統」と競合しながら西洋文化を貫流してきた伝統である。いまひとつはキリスト教的心性、なかでも「告白」の精神である。修辞学的対話においてはこれらの伝統が、前記の「具体的人間への志向」を核として融合統一されているようにおもわれる。

このような理解の当否はさておき、こうしたことがわたしなりに見えてきたのも、なによりもペトラルカ原典に触れながらかれ自身との対話を試みてきたからであらう。いまにして思えば、これも修

辞学的対話の試みにはかならなかったような気もする。

ペトラルカは熱烈な知の愛求者である。かれによれば、「無知は魂の大きな貧困であり、悪徳以外ではこれほど大きな貧困はない」（『自他の無知』四）。

ペトラルカはその古典研究においても、古代世界や古代文学について自分の知識や理解が増していくことに深いよろこびをおぼえ、旧来の通念や誤った知識を訂正することにも大きな意義を見いだしていた。しかしかれが古典研究においてもっとも切望していたのは、「科学的」次元の知ではない。つまり対象知（*scientia*）ではない。むしろ古代人との対話であり、交わりそのものである。かれらとの交わりによる自己形成であり、交わりにおいて現成する主体的真理である。この主体的真理、つまり自己自身のありようや「生」のありようとしての真理においては、対象知はその一モメント以上のものではない。ペトラルカのもとめる「知」とは、究極的には、自己のありかたや生きかたにかかわる知であり、かれはそれを「知恵」（*sapientia*）とよぶ。それは基本的に「自覚」としての知であろう。哲学的「知」なるものがすぐれて主体的な知であり、哲学とは「自覚」の学であるとすれば、かれが探究してやまなかったのはまさに哲学的知にほかならない。しかし敬虔なキリスト者ペトラルカによれば、それは「真の信仰」に根拠づけられた知でなければならない。だからキリストの「福音」なしには、と、かれはいう。「われわれは多くを学べば学ぶほど、それだけいっそう無知になり不幸になるでしょう」（『親近書簡集』第六卷二）。

科学がどれほど進歩し、われわれの科学的知識がどれほど豊かになろうとも、われわれの知が科学的次元のそれにとどまるなら、どこまでいっても知識増殖の悪無限があるだけであらう。たしかに、ひろく世界に「旅する」こと、おのれの殻を出てそとにひろがることは、精神の強さのあらわれである。ペトラルカも旅を愛した。旅の動機のひとつは見聞欲であつた。しかし自己に還ることのないひろがりには、たんなる拡散にすぎない。自己内還帰つまり「自己反省」がなく「自覚」のない外行は、自己忘却でもあらう。おびたしい知識欲や関心にふりまわされ、あるいはひききかれて、そのためにわれわれの魂が、自己自身が、ばらばらの断片と化するともありうる。対話篇『わが秘密』の巻末にちかく、フランチェスコは自戒している。

「できるだけわたし自身のことには気をくばりましょう。わたしの魂のばらばらの断片をあつめ、注意深くわたし自身のもとにとどまりましょう」(第三巻四)。

そのためにこそペトラルカは対話をした。自己のありよう、自己の真なるありようをたずねて、たえず対話してやまなかった。キケロやセネカやウェルギリウスのような異教作家と。アウグスティヌスのようなキリスト教作家と。そして結局は自己自身と対話しつづけたのである。

そのようなかれを理解しようとする試みは、基本的にどのようなものであるべきなのか。

かれを理解しようとしながら、そのじつかれを、かれについての断片的知識のうちに埋没させ、かれを「ばらばらの断片」と化せしめることをおそれる。かれを理解するとは、かれの生涯や作品について、あるいはさまざまな活動について、ただ知識を増やしていくことではなからう。これもむろん

必要であり重要でもあるが、より重要なのはむしろ、かれとの「対話」であろう。かれが古代作家たちとのあいだでおこなったような対話を、かれ自身とのあいだで試みることであろう。じつは本書も、そのような試みのささやかな所産にはかならない。

偉大な著作家というものは、そびえたつ巨峰のようなもので、ひろい文化の裾野をもち、さまざまな文化伝統と深くむすびつき、そのうえに個性的で秀麗な山容をくつきりと刻み出しているようにおもわれる。それだけに、いざ近づいてみると、さまざまな峰あり谷あり、森あり草地ありで、なかなか全容がつかめない。しかしその巨峰を具体的に理解するには、危険を冒して山に分け入り、じかに山肌に触れなければならない。

ペトラルカという大山に分け入る努力のささやかな成果をまとめた本書は、むしろ山容全体の表現からはほど遠い。しかし、たとえば巨匠の絵を模作するばあい、全体の構図やこれに類するものについては比較的似せやすいが、細部の表現については不可能という。細部の表現にも、あるいはむしろ細部の表現にこそ、巨匠の表現の個性的な「質」、つまり芸術性は、よくにじみでているのであろう。だから、細部についての詳細な観察や深い洞察は、ありきたりの概観的な観察や叙述よりも、はるかによく作品理解や作家理解になりうるということも、おそらく真であらう。

ごく限定された特殊研究にすぎないこの小著も、ねがわくばペトラルカという大山のひだのひとつに深く触れたものであってほしい。おなじく、ペトラルカ対話篇というひとつの峰を介して、西欧対

話体文学の長大な山脈やまなみにもかほどかつながるものであってほしい。——そのようなかたちで、特殊研究でありながらも普遍性をやどし、たんに特殊ではなく個性的であってほしいものである。

このような願いをこめて、この小著を、ペトラルカやルネサンスに関心をもつ人たちに、そしてまた対話体文学や「対話」という問題に関心をよせる人たちに、ささやかな研究成果として贈りたい。

ペトラルカ原典表

本書で言及または訳出引用するペトラルカ原典は、下記の版に収録されているものを用いる。ただし典拠は本文中に邦訳名で示し、下記諸版の頁数ではなく各作品の巻・章番号を記す。

- 『アフリカ』 *Africa*, edizione critica per cura di N. Festa, Firenze 1926.
- 『牧歌集』 *Bucolicum carmen*, in *Il Bucolicum carmen e i suoi commenti inediti*, a cura di A. Avena, Padova 1906 (ristampa anastatica, Bologna 1969).
- 『戴冠式演説』 *Collatio laureationis*, in *Opere latine* di Francesco Petrarca, a cura di A. Bufano, Torino 1975, pp. 1255-83.
- 『宗教的閑暇』 *De otio religioso*, a cura di G. Rotondi, Città del Vaticano 1958.
- 『順逆両境への対処法』 *De remediis utriusque fortunae*, in Francisci Petrarcae……*Opera quae extant omnia*……, Basileae 1554 (reprinted ed., Ridgewood, New Jersey, 1965).
- 『自他の無知』 *De sui ipsius et multorum ignorantia*, in *Opere latine* cit., pp. 1025-1151.
- 『著名人伝』 *De viris illustribus*, ed. critica per cura di G. Martellotti, vol. I, Firenze 1964.
- 『孤独生活論』 *De vita solitaria*, in Francesco Petrarca: *Prose*, Ed. Ricciardi, Milano-Napoli 1955, pp. 285-591.
- 『韻文書簡集』 *Epistolae metricae*, in Francischi Petrarcae *Poëmata minora quae extant omnia nunc primo ad trutinam revocata ac recensita*, ed. D. Rossetti, Milano 1829-34, vol. II (1831), vol. III (1834).
- 『親近書簡集』 *Familiarium rerum libri*, ed. critica per cura di V. Rossi e U. Bosco, 4 voll., Firenze 1933-42.
- 『老年書簡集』 *Senilium rerum libri*, in *Opera omnia* cit.
- 『後世の人に』 *Posteritati*, in *Prose* cit., pp. 1-19.
- 『無名書簡集』 *Liber sine nomine*, in Paul Piur: *Petrarcas 'Buch ohne*

- Namen' und die Päpstliche Kurie*, Halle 1925, pp. 161-238.
- 『雑纂書簡集』 *Epistolae variae*, in Francisci Petrarcae *Epistolae de rebus familiaribus et Variae*, ed. Gius. Fracassetti, Firenze 1859-63, vol. III, pp. 309-488.
- 『イタリヤ誹謗者論駁』 *Invectiva contra eum qui maledixit Italie*, in *Opere latine cit.*, pp. 1153-1253.
- 『医師論駁』 *Invective contra medicum*, a cura di P. G. Ricci, Roma 1950.
- 『学識も美德もない要人論駁』 *Invectiva contra quendam magni status hominem sed nullius scientie aut virtutis*, in *Opere latine cit.*, pp. 983-1023.
- 『聖地旅行』 *Itinerarium ad sepulcrum Domini nostri Ihesu Cristi*, in Francesco Petrarca: *Itinerario in Terra santa*, a cura di F. Lo Monaco, Bergamo 1990.
- 『痛悔詩集』 *Psalmi penitenciales*, in Pétrarque: *Les psaumes pénitenciaux*, publiés d'après le manuscrit de la Bibliothèque de Lucerne par Henry Cochin, Paris 1929.
- 『記念すべき事績』 *Rerum memorandarum libri*, ed. critica per cura di Gius. Billanovich, Firenze 1945.
- 『俗事断片詩集』 (『カンツォニエーレ』) *Rerum vulgarium fragmenta* (= *Rime sparse* = *Canzoniere*), in Francesco Petrarca: *Canzoniere*. Testo critico e saggio di Gianfranco Contini, Torino 1964, 1992.
- 『わが秘密』 *Secretum* (= *De secreto conflictu curarum mearum*), in *Prose cit.*, pp. 21-215.
- 『遺言書』 *Testamentum*, in *Opere latine cit.*, pp. 1341-57.
- 『凱旋』 *Triumphus (Trionfi)*, in Francesco Petrarca: *Rime•Trionfi e poesie latine*, Ed. Ricciardi, Milano-Napoli 1951, pp. 479-578.
- 『愛欲の凱旋』 *Triumphus Cupidinis.*
- 『貞潔の凱旋』 *Triumphus Pudicitie.*
- 『死の凱旋』 *Triumphus Mortis.*
- 『名誉の凱旋』 *Triumphus Fame.*
- 『時の凱旋』 *Triumphus Temporis.*
- 『永遠の凱旋』 *Triumphus Eternitatis.*

注 記

- 1) 『順逆両境への対処法』の諸対話篇のうち、つぎの校訂版に収録されているものは、これらの版によって読む。

Prose cit. pp. 605-645.

Francesco Petrarca, *De remediis utriusque fortunae*. Zwaisprachige Ausgabe in Auswahl, übersetzt und kommentiert von R. Schottlaender, München 1975.

- 2) 韻文書簡のうち、下記のペトラルカ選集に収録されているものは、これらの校訂版によって読む。

Rime・Trionfi e poesie latine cit., pp. 705-805.

Opere di Francesco Petrarca, a cura di E. Bigi, Milano 1963, 1994¹⁰, pp. 393-491.

- 3) 『老年書簡集』の書簡のうち、つぎの選集に収録されているものは、これらの校訂版によって読む。

Prose cit., pp. 1027-1159.

Opere cit., pp. 885-969.

Epistole di Francesco Petrarca, a cura di U. Dotti, Torino 1978.

Francesco Petrarca, *Le senili*. Testo a cura di E. Nota. Introduzione traduzione note di U. Dotti, Libro primo, Roma 1993.

- 4) 『雑纂書簡集』については下記の校訂版を参照する。

Francesco Petrarca, *Lettere disperse. Varie e miscellanee*, a cura di A. Pancheri, Parma 1994.

- 5) 書簡集からの引用はすべて巻番号と書簡番号で示すが、『無名書簡集』と『雑纂書簡集』はいずれも1巻だけから成るので書簡番号のみで示す。『老年書簡集』の巻番号と書簡番号の表示は、*Opera omnia* のそれによらず、つぎの手引書で採用されているものによる。

E. H. Wilkins, *Petrarch's Correspondence*, Padova 1960.

- 6) 『わが秘密』全3巻は章分けがないが、同書からの引用は便宜的に下記邦訳の巻・章番号によって示す。

ペトラルカ『わが秘密』近藤訳、岩波文庫、1996。

(本書の引用訳文中の……は著者による省略をあらわし、〔 〕内は著者による補足である。傍点も著者)。

目次

目次

まえがき	v
ペトラルカ原典表	xvi
序論——西欧思想史と対話体文学の伝統	三
はじめに	三
一 対話体文学の伝統	四
二 対話体文学の変質	八
三 ルネサンス対話篇	一四
四 中世対話篇の歴史的背景	一七
五 対話体文学の新しい可能性	三〇
六 ルネサンス対話篇の歴史的背景	三六
七 ペトラルカの場合	五一

I 修辞学的対話……………六五

- 一 修辞学的伝統の再評価……………六五
- 二 修辞学的伝統とペトラルカ……………六六
- 三 ペトラルカと修辞学的文化の再生……………七一
- 四 人間形成と理想的人間像……………八二
- 五 フマニタスの人……………八四
- 六 人間形成と文学教育……………八六
- 七 「魂の世話」と「ことばの世話」……………八九
- 八 修辞学的対話……………九三

II 対話体文学論——「わが秘密」考……………一〇三

- はじめに……………一〇三
- 一 「わが秘密」における対話の構造……………一〇五
- 二 著作の背景と時期……………一一一
- 三 対話の人物……………一二六
- 四 アウグスティヌス像……………一九
- 五 告白としての対話……………一三五

六 『わが秘密』とルネサンス対話篇	一四六
おわりに	一五七

Ⅲ 「真理」の光のもとに	一六一
--------------	-----

一 自己探究としての対話	一六一
二 対話の構造と探究	一六三
三 修辭学的対話	一六七
四 「真理」の臨在	一七四
五 「理解するために信じる」	一七六
六 「自己自身を知れ」	一七九
七 対話と愛	一八六
八 対話の「場」	一九〇
おわりに	一九五
追記	一九六

目次	
Ⅳ 自叙伝と対話篇のあいだ	二〇七
はじめに	二〇七

一	自叙伝のもくろみ——山頂の内省	二〇八
二	「嵐」と「港」	二一四
三	未完の自伝——『後世の人に』	二二六
四	内なる戦い——『わが秘密』	二三六
五	倒錯せる意志	二三五
六	書簡体「自伝」と対話体「告白」	二四〇

V ペトラルカとクザーヌスの対話篇

	はじめに	二五一
一	執筆の動機と対話の設定	二五四
二	対話の人物と対話の構造	二五八
三	対話の人物と探究	二六八
四	対話の構造と探究	二七三
五	「一なる宗教」と宗教的寛容の思想	二八三
六	〈告白としての対話〉と〈啓示としての対話〉	二九一

目 次

VI ペトラルカ研究小史	二九七
一 出会い	二九七
二 研究こととはじめ	二九九
三 研究史の反省的回顧	三〇三
四 原典へ	三〇六
五 研究の今後のために	三〇九
補遺 ペトラルカ関係邦語文献	三二三
あとがき	三二五
註	八
人名索引	三
イタリア語目次	I